

JSOG Newsletter

Reason for your choice

No.13
October
2013

わたしたちの医療は“新しい生命”を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

Annual Clinical Meeting

本番開会前の pre-congress program から参加しました。各セッションでは活発な質疑応答が行われており、日頃臨床現場で抱いた疑問を専門家に問うものが多かったように感じます。最も必死だったのは8名ほどの少人数でディスカッションするランチミーティングで、会話の速さに付いて行くのが大変で、しかしどうにか議論に参加することが出来ました。(名古屋大学・諸井博明先生)

現地医療施設 Ochsner Medical Center 見学

現地の若手産婦人科医の方々に病院内の案内ならびに米国医療の骨組みを説明していただき、米国の医療現場を肌で感じる事ができました。日米産婦人科医療の連携と今後の交流をより一層深めていくことが可

ACOG 若手医師との交流

最初のイベントは、米国でもより他国からきた若手医師との welcome dinner でした。来場していた若手医師のほとんどは女性で、自然と女性医師を取り巻く問題、結婚・育児と仕事の両立等の話となりました。米国でも日本と同様に両親をはじめ家族の支えがあればこそ full time で働けているというものでした。『社会のために産婦人科医療をやる』という情熱を強く感じました。(久留米大学・福井章正先生)

Junior Fellow College Advisory Council (JFCAC)

による企画にも参加できましたが、彼らにはすでにその親組織である ACOG との連携の中で、次世代のリーダーを目指す強い意識があり、努力によって誰にでもチャンスがあると語っていました。次世代を考え行動している同世代の医師の存在に目が覚める思いでした。(杏林大学・松島実穂先生)



派遣医師全員での記念撮影

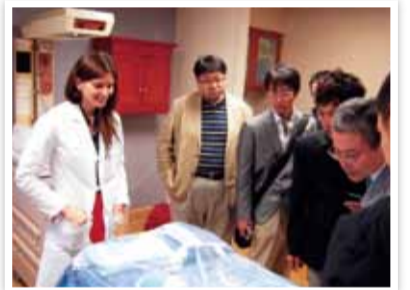
日米若手医師交換プログラム参加体験記

The American College of Obstetricians and Gynecologists

ACOG

米国産科婦人科学会

2013年5月4日から8日、ニューオーリンズの Ernest N. Morial Convention Center にて第61回 ACOG Annual Clinical Meeting が開催され、日本産科婦人科学会の若手医師6名が派遣されました。ACOG との若手医師交換プログラムは年々充実してきています。本会の若手医師6名はどんな体験をしてきたのでしょうか。また ACOG の若手医師との交流で何を感じたのでしょうか。生の声をお届けします。



Ochsner Medical Center 見学風景

能であると感じられ、それらを担っていくことは我々が成すべき最も重要な役割の一つであると思います。(鳥居裕先生)

限られた数の産婦人科医師でも充実した医療体制を提供するひとつのモデルとして今日日本でも叫ばれている集約化の実態に触れ、そして実際に働く医師の貴重な話を聞くことが出来ました。(京都大学・谷洋彦先生)

本会若手医師同士のきずな

バーボンストリートで真夜中まで共に過ごした最終日は忘れられない思い出です。同行した JSOG のメンバーとは、札幌で行われた日本産科婦人科学会学術集会までの10日間という長い時間を共に過ごしたことで非常に強い絆が生まれ、素晴らしい仲間を得ることが出来ました。(松島実穂先生)

日加若手医師交換プログラム参加体験記

The Society of Obstetricians and Gynaecologists of Canada

SOGC

カナダ産科婦人科学会

2013年6月10日から16日、カルガリーの TELUS Convention Centre にて第69回 SOGC Annual Clinical Meeting が開催され、日本産科婦人科学会の若手医師3名が派遣されました。SOGC との若手医師交換プログラムは SOGC の財政的理由などから今年度が最後になります。本会の若手医師3名は最後の派遣医師として何を感じたのでしょうか。今後、SOGC との交流復活の道は見いだせたのでしょうか。派遣医師の声をお届けします。



Annual Clinical Meeting

カナダでは産婦人科医の95%が女性という驚きの数字を聞き、何か日本産科婦人科学会の将来像を見たような気がしました。ベテラン医師が自分の臨床経験をフィードバックさせ、それを若手医師らが議論することで、お互いのレベル向上を目指しているような雰囲気でした。どれもわかりやすく、大変興味深く聴講できました。(東京大学・長阪一憲先生)

百武百恵先生との出会い

GALA Dinner では現地で生まれ育った Dr. Momoe Hyakutake (百武百恵先生) が urogynecology の領域で The CFWH Grants Award を表彰され、とても刺激を受けました。(東京医科大学・高木清考先生)



SOGC 会長 Dr. Douglas Black との記念撮影

今後の SOGC との交流

大変残念ですが、日産婦からの SOGC 派遣は今年が最後と聞きました。SOGC は ACOG のような派手さはなく、こじんまりしていますが、臨床現場を直視した議論を聞くことで、医療事情を垣間みられる良い学会だと思えます。また派遣の機会が生まれて欲しいです。(長阪一憲先生)

ハプニング

入国審査では、私一人だけが別室に連れて行かれ、長時間の尋問を受けましたが、何とか入国できた次第であります。(吉岡崇先生)

本会若手医師同士のきずな

今回一緒に参加した4人のメンバーと1週間ともに過ごし、学年、分野、大学を超えた横のつながりができたと感じました。今後学会を通じていろいろな場面で協力し、これから一緒に産婦人科を盛り上げていく関係になれるのではないかと思います。(高木清考先生)



左端が Dr. Momoe Hyakutake です

Joint FIGO-JSOG Workshop for Junior Fellows

—若手医師が主役の国際ワークショップ—

櫻木会長の掲げたスローガン、テーマの気持ちを込めた一番のプログラムが“Joint FIGO-JSOG Workshop for Junior Fellows”でした。

日本産科婦人科学会では総勢13名の若手産婦人科医師を全国からつり、学術集会の半年前から集まりプレゼンテーションの内容についてディスカッションを繰り返し本番に臨んでいます。ここから先は、メンバーからの実体験を記していただきます。

【ちょっと大変だった準備】

2012年6月12日、Exchange Program member就任依頼状が届いた。間髪いれず、上司からも「もちろん出るよね？」という(有無を言わさぬ)ありがたいお誘いの電話。

2012年8月31日、第1回集会(初顔合わせ)。簡単な自己紹介の後、テーマ毎に分かれ、発表内容について話し合った。五里霧中の中、さっそく準備が始まった。…始まったはずだったが、日々の仕事に追われ、手つかずで経過。しかしそんな静寂は11月某日、「2週間以内に抄録を提出(もちろん英語で)」というe-mailによって破られた。泣きながらメンバーと連絡をとり、短期集中で抄録作成(もちろん英語で!)、ぎりぎり提出。

2013年1月18日、第2回集会(進捗状況報告)。私達のチームは各自作成したスライドを元に意見をまとめた。しかし、他の2チームは既にかなり完成度の高いスライドを作成していた。ここからやや必死に取り組みが始まった(ような気がする)。メールを駆使してスライドと原稿を作り上げていった。

2013年3月18日、発表者のみ集合。無事終了のメールが届き、安心。

2013年4月12日、第3回集会(最終プレゼンテーション)。各自、年度末で忙しい中、スライド・原稿を完成し、模擬発表。

【どきどきの本番】

開始時間とともに英語onlyの会場へと変わり、出来る事はすべてやった(はずの)私達は緊張しつつ着席。HPVのセッションでは日本の低検診率が浮き彫りとなり、ワクチンや検診率の向上への取り組みの差や、子宮頸癌の若年発症や腺癌の増加など共通の問題点などが明らかになった。OCでは文化的背景や認識の差などによる普及率の差が顕著であった。ACOGや諸外国の先生方からするどい質問が飛び交う中、あつという間に合計4時間のWorkshopが終了した。長く苦しい準備期間だったが、終わった後の達成感・充実感は筆舌につくしがたいものがあった。

【おつかれさま懇親会】

4月某日、上司から「5月11日のパーティーの仕切り、よろしくね」と。え?私??と思いつつ、「はい!」とすっかり引き受けてしまった。



↑1次会:皆、笑顔!

↑2次会:美味しい食事とお酒とともに...一番奥の先生は若手ではありません



↓3次会:全員、産婦人科医...もちろん日本人

参加者は全て若手医師。ACOGメンバーが予定以上にわらわらと増え、夫も参加し、カナダ人は友人を連れてきて、韓国人は無断欠席...やや無法地帯と化しつつ、若手医師のための気楽な立食パーティーが総勢41人で始まった。

Workshopではテーマ別に各国の参加者によるディスカッションの場がなかったため、参加者からはほっとした反面、残念という声もあがっていた。しかし、Workshopの際にはできなかった議論がパーティーでは打ち解けてじっくりとできて非常に良かったとの感想も。

2次会は総勢35人でさらに活発な国際交流&国内交流が行なわれた。3次会はものたりないまだまだ元気な日本人たちと五丈原(ラーメン屋)を占拠し、解散となった。

【新企画 Joint FIGO-JSOG Workshop for Junior Fellows 参加を振り返って...】

前年までの企画 International Seminar for junior fellows でも同様に諸外国の若手医師との交流を目的としていたが、以前参加した際にはその場限りの表面的な交流にとどまり、刺激は受けたが後に続くものが乏しかった。しかし今回の企画では、十分な時間をかけた準備、考え抜かれた発表の場、そして若手医師だけのパーティーを通して、海外だけでなく日本各地の同世代の産婦人科医とじっくり交流できたことが非常に貴重な経験となった。

このような素晴らしい場を用意し、若手医師育成に心を砕いてくださった日本産科婦人科学会に深く感謝するとともに、今後、多くの若手医師が積極的にこの有意義な企画に参加してくれることを願います。ある日、皆さんの元に参加意志確認の手紙が届いたら、すぐに参加を表明してください。絶対に損はしません!

北海道大学 赤石 理奈

第65回日本産科婦人科学会 学術講演会報告

Annual Congress Report



第65回日本産科婦人科学会学術講演会を平成25年5月10日から3日間の日程で開催いたしました。総参加者数は5348名におよび札幌での開催としては過去最大となりました。今回の学術講演会は北海道大学婦人科教授櫻木範明会長による「羽ばたけ 世界へ 未来へ」のスローガンのもと、プログラム編成を行っております。将来の我が国の産婦人科医学・医療の発展を担う若手医師・医学生のみならず、集会長の気持ちが入められております。本会では数々の口演プログラムを企画いたしました。「多様性と国際性」は今回集



産科急変対応トレーニングセミナー

会長が掲げたテーマでもあります。教科書を読んでいるだけでは決して得ることのできないことを学ぶ良い機会であったと思います。今回は初期研修医や学生の皆さんが学術講演会に興味を持って下さることを目指して、手術シミュレーション機器を実際に体験できるコーナーや、産科救急トレーニングの実体験セミナーを企画しました。申し込み予約があつたという間に一杯になってしまつたほどで、非常に好評でした。また、



若手医師企画での一コマ

指して、手術シミュレーション機器を実際に体験できるコーナーや、産科救急トレーニングの実体験セミナーを企画しました。申し込み予約があつたという間に一杯になってしまつたほどで、非常に好評でした。また、

第5回を迎えた日本産科婦人科学会若手医師企画では「10年後の産婦人科医療—わたしたちの未来予想図—」と題して、日本の産婦人科医療の将来ありえるかもしれない姿を若手医師の視点から予想し、その可能性と問題点を探りました。学術講演会は、「お堅いこと」ばかりで成立しているわけではありません。学術講演会の恒例となつたといえるNST (Nissan Sound Team) による素晴らしい演奏、そして学術集会長によるご当地一番ソング「大空と大地の下で」の熱唱は今でも耳に残っております。



情報交換会での櫻木会長による「大空と大地の下で」

今回は平成26年4月18日〜20日の日程で東京国際フォーラムにおきまして筑波大学教授吉川裕之学術集会長のもと、第66回日本産科婦人科学会学術講演会が開催されます。正会員だけではなく、より多くの初期研修医や医学生の皆さんが気軽に参加くださることを願っております。

初期研修医の声

初期研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

私は学生の頃から外科系志望であり、周産期医療に興味があったことから、初期研修の3ヵ月間を産科婦人科で研修させていただきました。短い期間ではありましたが、数多くの分娩を経験させていただくことができ、どのお産も赤ちゃんを抱く母親の姿が感動的でした。もちろん全てがハッピーな分娩ではありませんが、胎児形態異常などを診断された母親をサポートしながら胎内の新しい命を救う医療はとてまかつよく、このような未来の可能性を広げることができる医療は、大変やりがいのあることだと感じました。

また産婦人科は、周産期医療だけでなく、内分泌や腫瘍など幅広い分野に及んでいることに加え、若年から高齢者まで女性の一生に寄り添った医療を行えることは、同じ女性としてもとても魅力的に感じています。まだ将来

専攻する診療科は決定できていませんが、この3ヵ月で経験・勉強させていただいたことを忘れず、残りの初期研修も一生懸命頑張りたいと思います。

未来の可能性を広げることができる医療

九州大学病院・池田祐子



学生時代に実習で出産に立ち会う機会があり感動したことが産婦人科医を志すきっかけとなりました。その時の感動が忘れられず、命の誕生という素敵な時間を共有できる産婦人科の道に進もうと思うようになりました。研修医になり実際に産婦人科をローテートし周産期だけではなく、良・悪性腫瘍や不妊治療など幅広い分野も学べるという点にも非常に魅力を感じました。

実際の臨床現場では胎児疾患や母体合併症、悪性疾患の患者さんの厳しい状況と向きあわなければならないこともあります。仕事に追われたり自分の力不足を実感して落ち込むこともあります。先輩医師や同期に支えられ、患者さんの何気ない一言に励まされ充実した毎日を過ごしています。

また、研修期間中に将来の専攻科以外の知識をできるだけ身につけたいと考え、研修スケジュールを組んでいます。この二年間にしっかりと学び今後の診療に活かしたいと思います。まだまだ

医師として知らないこと、学ばなければならないことばかりですが、いつか「先生に診てもらえてよかった」と言われる産婦人科医になることが私の目標です。

「先生に診てもらえてよかった」と言われる産婦人科医に

大阪大学病院・実森万里子

